

## 第7回放射線管理士セミナーに参加して

川崎市立川崎病院 齋藤 敦子

平成27年12月12日、愛知医科大学で開催された「第7回放射線管理士セミナー」に参加した。

愛知県診療放射線技師会の中村副会長の挨拶のあと、まずは神奈川県放射線管理士部会会長の濱田さんより、これまでの活動報告があった。講習会の開催をはじめ、市民イベントへの参加など、積極的に活動をしている。今回のような他県と合同開催の放射線管理士セミナーでは、神奈川県の横須賀三浦原子力災害特別派遣チーム（NAS チーム）考案のセグメント法というサーベイ方法を多くの県に知ってもらい、実践してもらおうという目的で、毎回充実した内容でセミナーを行うことができている。また、有事の際には被災地へサーベイに行くために必要な、神奈川県とのネットワークも作り上げられているというお話だった。

次に愛知県診療放射線技師会放射線管理士部会会長の南保さんより、これまでの活動報告があった。愛知ではあまり活動がないということだったが、放射線展での被ばく相談や、学会での発表などの活動があり、今回のセミナーを機に、今後は継続的に講習会を行うことになったとのことだった。会場からの意見には、今後の若い世代の育成や向き合い方についてのものがあった。それは、現在の若い診療放射線技師には撮影の際の線量管理に対する責任感をあまり持っていない人が多く、どのくらいの線量を使って写真を作っているのかという認識を足元から見直す必要があるという意見で、それには会場全体が同意していた。診療放射線技師一人ひとりが、特に放射線管理士が中心となって、教育の面でも意識を改めることで、教える側も教えられる側も、いざというときに一般の方々に納得の行く説明ができる元になるのではないかと思った。

次の特別講演では、福島原発事故後の放射線被ばくとリスクコミュニケーションについて、セントメディカル・アソシエイツ LLC の広藤さんがご自身の活動をもとに幅広い分野において講演して下さった。原発事故後、初期の段階から福島県の様々な場所で、住民に向けて放射線影響についての説明をするという経験をされてきた方なので、実際に聞いてきた住民の不安や質問、説明を聞いた際の反応など、とてもリアルに教えていただいた。相談に来る住民の話には発災直後から現在までに変化があり、初めは、住んでいる場所、健康への不安、子どもたちへの不安、育てている作物など、身の回りに関する内容が多か

ったのに対し、現在は、心の病にかかってしまい漠然とした不安を抱えている人が多くなっているとのことであった。リスクコミュニケーションについてもお話いただき、人間が恐怖感をおぼえやすいものには条件があつて、原子力災害というものはその全てを満たすということだった。大丈夫だということをよそから来た専門家がいくら講演しても、その恐怖はなかなか拭いきれない。わかってもらうまでには根気が必要で、量と時間なしに放射線被ばくの影響を正しく理解してはもらえないとのことだった。

実際に現地へ行って生の声を聞いてきた方の話は重みがあり、なかなか経験できないような災害時の活動を疑似体験できたように感じる内容であった。

短時間のセミナーだったが盛りだくさんの内容でとても充実した時間を過ごすことができた。今回得たことを、今後の自分の仕事や活動に生かしていきたいと感じた。

